

超音波検査で急性増悪後の治療経過を観察しえた難治性ホジキンリンパ腫の一例

◎野口 真那¹⁾、安江 智美¹⁾、西浦 明穂¹⁾、松野 徳視¹⁾、三栖 弘三¹⁾、野村 浩祐¹⁾、井戸田 篤¹⁾
地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター¹⁾

40歳代男性。骨髓異形成症候群(RAEB2)に対する同種臍帯血移植後のフォロー中、移植後6年目に上気道炎症状やCRP高値を示し、精査目的で施行したPET-CT検査にて全身リンパ節、脾臓、骨に多発する¹⁸F-fluorodeoxyglucose (FDG)の集積を認めた。頸部リンパ節生検の結果、結節硬化型ホジキンリンパ腫と診断され、化学療法を開始した。治療開始から半年後、CRP軽度高値の炎症反応あり、PET-CT検査では斜台や胸骨柄に集積残存を認め、難治性結節硬化型ホジキンリンパ腫と診断された。化学療法の効果は期待できず、同種骨髄移植を施行することとなった。

スクリーニングを目的とした移植前腹部超音波検査では、脾腫を認めるも、腹部臓器に悪性を疑う所見は認めなかった。移植前腹部超音波検査から7日後、CRP高値を示し、胸腹部単純CT検査にて肝S8辺縁に複数の淡い低吸収域を認めた。同日施行の腹部超音波検査では、肝右葉に多発する10mm大の淡い低エコー像を認め、悪性リンパ腫の肝浸潤または膿瘍を疑った。肝生検では細菌は検出されず、膿瘍は否定的であった。肝腫瘍の指摘から10日後、38度前

後の熱発あり、腹部超音波検査では肝腫瘍の増加、増大とともに、腫大した脾臓内にも肝腫瘍と類似した低エコー腫瘍を認めた。解熱されたことから、2日後に同種骨髄移植を実施した。超音波検査では、移植後20日目から腫瘍の減少および不明瞭化を認め、移植後50日目では、肝臓、脾臓ともに明らかな腫瘍像を描出しえず、超音波画像上はリンパ腫浸潤の消失と考えられた。

難治性ホジキンリンパ腫の急性増悪から同種骨髄移植後の肝浸潤消失まで、超音波検査で治療経過を観察しえた症例を経験した。

大阪国際がんセンター 06-6945-1181